

「心が生きる教育のための国際拠点」グローバル COE ワークショップ

「メディアの生成—聖俗と社会関係資本から考える」

(グローバル COE ユニットB・公開ワークショップ)

- 日 時: 2009 年 11 月 6 日(金) 15:00~18:00
- 場 所: 京都大学楽友会館 大会議室
http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/map6r_ys.htm
- 参 加: 入場無料、参加自由
- 企 画: 佐藤卓己(京都大学大学院教育学研究科)
- 司 会: 佐藤卓己(京都大学大学院教育学研究科准教授)
- パネラー: 加藤秀俊(社会学者)
佐伯順子(同志社大学大学院社会学研究科教授)
柴内康文(同志社大学大学院社会学研究科准教授)
- 連絡先: 京都大学大学院教育学研究科・佐藤卓己宛てメール
tsato@educ.kyoto-u.ac.jp
- 参考資料:
 - ① 加藤秀俊『[メディアの発生: 聖と俗をむすぶもの](#)』(中央公論新社 2009 年)
 - ② 佐伯順子『「愛」と「性」の文化史』(角川選書 2008 年)
 - ③ ロバート・D・パットナム(柴内康文訳)『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』(柏書房 2006 年)
 - ④ 佐藤卓己『ヒューマニティーズ 歴史学』(岩波書店 2009 年)

今日、「メディア」という言葉を新聞で見ない日も、テレビで聞かない日もない。一般に、メディアは「出来事に意味を付与し体験を知識に変換する記号の伝達媒体」と定義されている。しかし、この言葉自体にも歴史は存在する。本来の宗教用語「霊媒・巫女」から、二〇世紀資本主義システムの高度化とともに「広告媒体」、「情報媒体」へと大きく変化してきた(佐藤卓己『ヒューマニティーズ 歴史学』第4章参照)。こうした意味の系譜を意識することは教育学においても重要である。たとえば、ウェブ上でメディア教育の講演案内で次のような文章に出会う。

「**メディア**は子どもたちをどう変えるのか。**メディア**は教育に何をもたらすのか。私たち大人はまだその答えを見つけてはいない。」

このとき、「メディア」は何を意味しているのだろうか。人によって、新聞だったり、テレビだったり、インターネットだったりするだろう。しかし、この「メディア」を「霊媒」、あるいは「広告媒体」へと置換すると、その文脈はまったく違ったものに見える。

「**聖なるものへの接触**は子どもたちをどう変えるのか。**広告媒体**は教育に何をもたらすのか」。

ただ単に「メディアは教育に何をもたらすのか」では見えてこなかった別の世界が私た

ちの眼前に開けてくる。「私たち大人はまだその答えを見つけてはいない」のではなく、メディアをマジックワードのまま無意識に使うことで、私たちはその答えを隠しているのではないだろうか。

加藤秀俊先生の近著『メディアの発生』は、「私説 日本芸能史」とも銘打たれている。「聖と俗をむすぶもの」というメディアの原義から、歌舞伎、落語、演歌、さらに日本各地の祝祭行事などを考察した日本文化のメディア論である。本ワークショップでは、「加藤メディア論」の集大成と呼ぶべき豊富なテキストを素材として、まず比較文化研究者・佐伯順子先生と社会心理学者・柴内康文先生に新しい「メディア」研究の可能性を語っていただく予定である。佐伯先生は『遊女の文化史』以来、聖俗をめぐるジェンダー研究を展開されてきた。パトナム『孤独なボウリング』の翻訳者でもある柴内先生は、情報化と社会関係資本について研究を続けてこられた。

三人のパネル討議をふまえて、参加者全員で「メディア論」の射程を探ってゆくつもりである。なお、密度の濃いワークショップにするため、可能な限り加藤秀俊著『メディアの生成』に目を通した上で参加されたい。